
伝えきれない恋心

緒例

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝えきれない恋心

【Nコード】

N3913F

【作者名】

緒俐

【あらすじ】

東京のスタジオから流れる哀しいラブソング。歌っていたのは「晴天」。二人の青年ボーカリストだった。そのボーカルの一人、新は恋人の美砂に伝えきれない恋心があった……

第一話：陸上

東京のスタジオに悲しいラブソングが流れている。

歌うのは二人の青年。

辛い辛い恋の話は、日本人の心にどう届いているのだろう。

「僕を忘れないで 伝えきれない恋心」

二人の声のハーモニーはどこか悲しかったが、酷く澄んでいた。

「晴天」。この二人のグループ名である。そう、グループだったのだ。

今から一年前、晴天のボーカルの一人、中野新の恋人である仁科美砂は生きていた……

陸上競技場。アスリート達は自分の限界を超えようとひたむきに競技する。

中野新もその一人、高校二年生の中距離選手だった。

「あらたあ！ 負けるなあ！」

気合いの入った声で美砂は応援する。

今から自分も走り幅跳びの決勝だろうと新は心の中でツツコミを入れていたが、

一次予選から気合いを入れて応援してくれる幼なじみに多少の感謝はしている。

『余裕だって』

快調に新はフィニッシュを決めた。

そこで喜んでくれる美砂を期待してはいるものの、やはり少しばかり不満のようだ。

「おつかれさん。美砂のやつ不満たらたらだな」

もう一人の幼なじみである戸山勝弘は観客席から声をかけた。

赤いジャージ姿でリラックス中の勝弘は、明日の二百メートル決勝まで競技はない。

「全くだ。予選から自己ベストのタイムで走ってたらくたばる」

いかにも決勝に残る気満々だった。

しかし、それも仕方ないことである。

昨年の男子八百、千五百メートルともに一年生でありながら県二位の実力だ。

確実に決勝で全力を出す走りはしなければならない。

「そう言ってやるな。お前が去年負けて悔しがってたのは美砂なんだ。

少しでも昴さんに追い付いてほしいんだろ」

「キャプテンに追い付いて……あいつも兄貴の応援してやれよ」

仁科昴。美砂の兄であり陸上部のキャプテン。

しかも全国二連覇の化け物である。

「してはいるんだろ。だけど恋する乙女は兄貴より新なんだろ」

ニヤニヤしながら勝弘は新をからかうが、新にその手は通用しな

い。

「十七年間彼女いない奴にはこの幸せは分からないよなあ？」

「デメェ！ その足折ってやる！」

勝弘は出口に駆け上がった。

そのつかの間の時間、美砂は綺麗なフォームで空に舞い上がって
いた。

第二話：幼なじみの四人

男子八百メートル二次予選。

またもや楽勝で新は決勝に進出した。

「おつかれさん。なかなか良い走りだったな」

「そういう昴さんこそ自己ベストじゃないですか」

二次予選だと言うのに、昴はいきなり自己ベストを出して来た。それだけ昴の調子は良いということだ。

「まあな。調子が良いもんで」

「分けてほしいですね、その好調ぶり」

「やだね。明日も千五があるし」

百八十ある身長も、しなやかな筋力がついた細い体も、さらに容姿の良さまでが羨ましかった。

仁科昴という十八歳の青年は、きっと不幸というものから世の中で一番遠いのだと本気で思っていた。

「俺もあるんですけどね」

「だったら尚更だ。新に負けても負けなくても美砂はうるさいからな」

「昔からそうですけどね」

二人は笑った。新、勝弘、美砂、昴の四人は、昔からの腐れ縁で、何かあれば一緒になって遊んでいた。

それは現在も続いていることで、学校の規制さえなければタメ口を叩き会う仲である。

「それと新、勝に大会が終わったら家で焼肉パーティーするって言っ
つとけ。」

おふくろが最近、勝が家に来ないって歎いてるんだよ」

「おばさん勝のファンだもんな」

またも二人は苦笑した。

昂の母親は新も勝弘も息子のように可愛がってくれてる。
これも未だに変わらないことだ。

「分かったよ、昂ちゃん」

「さん付けしろよ、新ちゃん」

これが普通の二人であった。

「かっちゃん！ 新とキャプテン知らない？」

「うおっ！ ビビった！」

観客席から女子百メートル予選をボーっとして見ていた勝彦に、
美砂は鉄砲玉のように飛んで来た。

「さあ？ ダウンに行ったんじゃないか？」

「サブトラックにはいなかったのよ」

競技の後にはいつもサブトラックでクールダウンを行うはずの二
人が、

今日はその姿を見せなかったのである。

「競技場の外周でも回ってるんじゃないのか？ 昂さんの気分で」

時々、新と勝弘を連れて一体どこに行ったのか昂は消えることもしばしば。

ひどいときは三日間音信不通になる始末だ。

「全く！ マネージャーがマッサージ待ってるのに」

「なんなら俺が変わりに受けて来ようか？」

嬉しそうな顔をした健全男子高校生が一人いる。

「かっちゃんは新がやってくれるよ。」

だけど昂は最近疲労溜まってるみたいだから、ちゃんとケアしなくちゃいけないのよ」

「疲労？ 昂さん何かあるのか？」

勝弘の問いの答えは意外なものだった。

「それがね、昂は受験するんだって」

第三話：クールダウン

勝弘の予想は見事に当たっていた。

今日のクールダウンは二人で外周を廻っていたのである。

「珍しいな。昴さんが外周に行くなんて」

「たまにはな。美砂とマネージャーに見つかるとうるさいからな」

主にマネージャーだと新は思った。

ベタな恋愛ドラマでもなかりうが、キャプテンとマネージャーの関係は微妙である。

「昴さん、マネージャーと付き合わないんですか？」

告白されたんでしょ？」

新は軽い感じで尋ねてみた。

これも昔からの付き合いだからこそ出来るのである。

「まあな。嫌いじゃないから付き合い合っても良いんだと思う。

だが、そんな軽い気持ちは俺には持てないわけ。分かるか？」

「一応。俺がそうだし」

昴は笑った。妹を大切に思ってくれていることは確かだと分かっていたが。

「それはなによりだ。別に誰がどんな恋愛しようが勝手だと思うが、俺は最初から相手を傷付ける恋愛はしたくない。

まだ十八だから言われてられることかも知れないが」

昂の顔がやけに綺麗だと思ったのは、新にとってこれが初めてだった。

しかし、腐れ縁だからこそ言ってやる。

「……昂ちゃんはカッコつけだ」

外周から戻った後、カンカンに怒った美砂がいた。

「昂！ 新！ どれだけ探させたら気が済むのよ！」

「女子走り幅跳び二位おめでとう！」

「さすが美砂だ！」

二人は拍手喝采でその場を見事に乗り越えようと試みたが、それが通じる相手ではまずなかった。

「どうもありがとう。」

だけど、明日にリレーの予選を控えているアンカーをパシリに使う陸部の精神も考えものよね？

その元凶達の行動を予測して動かなくちゃいけない私の労力も考えてほしいわよね？」

目が完璧に怒りの文字に変わっている。

しかし、兄と恋人のタッグは折り紙つきだ。

「美砂ちゃん、機嫌直してくれよ。」

新ちゃんからのお願いだからさ」

「そうだぞ美砂。恋人は悲しませないためにいるもんだ。俺が悪かったから新ちゃんは許してやってくれよ」

卑怯者とはこういうことなんだろうと美砂は思う。

昔から心配かけた後は必ずこのやり取りが繰り返られるのだ。

「分かったわよ！　だけど今年の誕生日プレゼントは奮発してもらうからね！」

「グッジョブ！　新！」

「昂さん、ちゃんと妹に儉約教えてやってくれよ」

このコントみたいなやり取りを止めに勝弘はやってくる。

「三人とも、先生が呼んでるから早く来い。急がねえとこっちまで怒られる」

「そりゃまずい。走れ！」

四人は急いで駆け出した。

この平凡な時がずっと続くと、まだ誰も疑っていなかった。

第四話…ありがとう

「昴、新、ちゃんとダウンにはいったのか？」

「行きました」

顧問の前に並べられている四人は、まさに陸上部のエース達だった。

まだ若き顧問の松橋は、あと二日間多忙であるだろう生徒の調子確かめておきたかったようだ。

全国大会も考えなければならぬ四人に、こんなところで怪我をされては困る。

「そうか。ならば結構だが、昴、お前の調子は少々気になるな。

二次予選にしては飛ばしすぎじゃないのか？」

二次予選でいきなり自己ベストを叩き出した昴は、明らかにいつもと違った気がした。

「先生、心配いりませんよ。

何だかすぐく走れるんでそのまま行っただけですから。

それと新にまだ負けるわけにはいきませんしね」

どうやら今シーズンは本当に絶好調のようだ。それを聞いて松橋は安心した。

「だったら良い。新も故障の心配はないか？」

「大丈夫ですよ。全国までにピークを持っていく予定ですし」

去年、新はあと一步のところで全国を逃した。

自分以外の三人の幼なじみが遠征に行くことがすごく悲しかった。だからこそ、新は去年の倍の練習量を熟してきた。もう美砂を泣かせないためにも。

「今年に行けるな。勝弘、美砂、お前達も調子は上がって来てるんだ。」

このままペースを落とすなよ」

「はい！」

その日の試合は終わっていった。

「はあ、終わった。明日は千五だあ！」

気合いの入った新の声は夕焼けに馴染んでいく。

「くたばるなよ、新。」

お前は千五になると昂ちゃんとの差が開いていく」

「そうそう。まあ、昂は千五の方が専門だけだね」

勝弘と美砂は気合いを入れる新に見事なちゃちゃを入れてやる。

「そういうなよ。昂ちゃんは八百じゃ手を抜いてるみたいじゃないか」

「抜いてるかもよ？」

「マジか!？」

冗談だからこそ叩き合える軽口。

しかし、八百じゃ走り足りない感じはあるのだろう。

駅伝でも花の一区を断トツで走り抜いて来るのだから。

「まあ、昴には悪いけど、明日は新を応援してあげるね！」

美砂の気持ちですごくありがたかった。この恋人は誰よりも強い味方だ。

「ありがとう」

新は素直にそう答えた。

第五話：昂の夢

試合の後に昂はマネージャーの葵に捕まっていた。

一般的に見れば間違いなくかわいい部類に入る少女である。

しかし、そんな少女もさすがに痺れを切らしたんだろう。

告白の返事をもらいに來たのである。

「ごめんなさい。明日も試合なのに」

葵はすまなそうに謝った。きっと自分の行為は、マネージャーとしては失格なんだろう。

「いや、マネージャーがここまで辛い思いしてたなら早く言うべきだった。

ゴメン！ 君とは付き合えない」

昂は綺麗に頭を下げた。

それが葵にとってとても残酷だった。

「どうしても、かな？ 軽い気持ちでもダメなのかな？ 私は構わないのに」

ハラハラと涙が溢れてくる。

そして、昂の意外な答えを聞くことになる。

「マネージャー、俺さ、バイオリニストになりたいんだよ」

「バイオリニスト？」

突然の告白に少しだけ葵は驚いた顔をした。

昂にバイオリンなんてものは少しミスマッチな気もするが、仁科家は音楽好きだ。

「うん。まだ美砂にしか言っていないんだけどさ、俺は音大を受験するんだ。

そして世界に出るんだよ」

昂はすごく生き生きした表情で話す。

「だから、こんなに大変な夢に対して軽い気持ちを持つこともしたくないんだ。

マネージャーに対する気持ちもそれと同じなわけ。
俺の軽さは人を傷つけてしまうからな」

葵はやっぱり昂はすごいと思った。

全国一の選手は、自分の想像をいつも超えていく。だからこそ好きになったんだと思う。

「そっか。だったら仕方ないよね。

だけど最後に一つだけ聞いていい？ 昂君の好きな人って」

ふわりと二人の間に夕方の冷たい風が通り抜ける。

昂はびっくりした表情を浮かべたが素直に答えた。

「……正解」

少しだけ照れた顔はまさに隠しようのない事実。

葵は泣き止み、マネージャーとして忠告した。

「キャプテン！ そろそろ帰りましょう。

ちゃんとマッサージして食事と睡眠はしっかり摂ること！

新ちゃん達と話し込んで夜更かししないで頂戴ね」

「ああ。ありがとう、マネージャー」

キャプテンとマネージャーとしてのコンビは決して悪いものではない。

恋愛感情抜きなら、いつまでも友人として付き合いたいと昴は思っていた。

そして、それは昴が

「晴天」というミュージシャン達と共演する歳になっても、変わることはなかった。

その話は、六年先になる。

第六話…ラブ☆ロック

新と美砂は、帰り道に一軒の喫茶店に寄るのが日常である。そこが勝弘の実家のライブ喫茶だからだ。

「おかえり。今日の試合はどうだった？」

サックスの音色が心地よく感じる店。

そんな店のマスターである勝弘の父親は三人を出迎えた。

「美砂が幅で二位。俺達は明日決勝だよ」

父子家庭である勝弘の家は、どこか淋しいのではないかと思われがちだが、

実に自由に音楽の絶えることがなかった。

勝弘の母親は、勝弘が小学四年生の時に亡くなっていた。

「それは良かった。おめでとう、美砂ちゃん」

「ありがとう、おじ様」

美砂はニツコリ笑って答えた。

「親父、今日はバンドの予約入ってないのか？」

勝弘はニヤリと笑う。きっとこの時間に予約がないことを知っているからだ。

「一時間だけだぞ。美砂ちゃんも早く帰さないといけないからね」
「すぐそこだから大丈夫ですよ。」

そして三人はお客様の前にジャージ姿で現れる。
普通ならびっくりされるような衣装だが、常連達は大歓迎だ。

「よっ！ 待ってました！」

「皆、今日の試合はどうだったの？」

「昂ちゃんはどうしたんだい？」

様々な質問が飛び交う中、新は残念そうな表情を浮かべて答えた。

「……それが、昂ちゃんは失恋に失恋を重ね、とうとう立ち直れない状況に」

「新ちゃん、誰が失恋したんだよ」

後ろからコツンとツツコミが入る。

客から爆笑が起こる。

「それじゃ、一丁いきますか！」

俺達が創ったラブソングを一曲」

ギターを担いだボーカルは新、勝弘のドラムにベースが美砂。昂はピアノに向き合う。

この四人のバンド名はこの時、まだ

「晴天」ではなかった。

「聴いてください。タイトル」

「『ラブ☆ロック』で！」

いきなり美砂が叫ぶ。

そして新との立ち位置が変わったことに客達は驚いた。

それは美砂がメインボーカルを張ると言うことだ。

四人はアイコンタクトをとると、美砂だけの歌声から始まった。

「壊れるほど君を愛したら

この思いは届くのかな？

ベタな愛情表現さえ出来ないの

夢見^{たいよ}太陽！ ささやかな恋」

少し静まる。そして急激なアップテンポに観客達は大歓声を送った。

この歌が一年前の美砂の心情そのままだったと知るのは、また先の話。

そして翌日、疲れ知らずの四人は絶好調で試合に臨む。

第八話…鉢巻き

この日の試合を忘れることが出来るだろうか。
きっと競技場にいた者達のほとんどが記憶になんか留めていなくても、

新達四人は忘れることが出来ないものになる。

「やったあ！」

「よし！」

勝弘の男子二百メートル決勝の結果は、
ぶっちぎりの一位だった。

本人も納得行く走りだったらしく、息を切らしながらも嬉しそう
だ。

「やったな、勝弘」

「はい、あいつは凄い」

いつもだったら大はしゃぎの新と昴だが、今から自分達も八百メートルの決勝だ。

そして最大のライバルがここに揃っているのだから……

「新、千五の予選でバテてないよな？」

微笑を浮かべて昴は尋ねると、

「もちろん。俺は昴さんに勝つために力を温存してたんだ。絶対負けない」

普段が仲の良い分だけ、恐ろしく火花が散る。

しかし、純粹に走ることが好きだという気持ちはお互いに持っていた。

「それじゃ、いこうか」

二人はフィールドへ出ていく。

美砂はリレーの召集場所から、赤いユニフォームの二人を確認していた。

「美砂はどっちを応援するの？」

チームメイトの薫が好奇心旺盛で尋ねてくる。

「新だよ。新が八百メートルに掛ける思いって半端じゃないもん。」

この冬にとんでもない量を走り込んだんだから、絶対に勝てるよ」

普通なら惚気だと思われてしまうだろう。

しかし、恋愛感情全てを抜きにして美砂が新を応援していることを陸上部全員が知っていた。

新はそれだけ走った。一步も動けなくなるほど自分を追い込んだ。そこまで努力したのだ。

「勝つと良いね」

「うん」

中野新は第五レーンに立っていた。

「男子八百メートル決勝、出場選手を紹介します」

アナウンスが次々と選手の名前を読み上げていく。

「第四レーン、仁科昂君、南城高校」

昂は手を挙げ一礼する。

その動きでさえ全国一位の選手としか思えなかった。

「第五レーン、中野新君、南城高校」

頭に赤い鉢巻きを巻いて新は決勝に臨んでいた。

美砂がこの日のために新だけに作ってやったものである。

片手をすっと上げて、フィールドに溶け込んでいく新が綺麗だと美砂は感じていた。

「負けるな」

新はそう囁いた。そう自分に言い聞かせたのだ。

そして紹介が終わり、いよいよレースが始まる。

「位置について……」

沈黙がおとずれ、それははじけた。

勝負が始まったのだ。

第八話…ペース

「あらたあ！ 飛ばせエ！」

「キャプテン！ がんばれ！」

「いけいけ新！」

「おせおせ昂！」

南城高校陸上部の面々はそれぞれの応援を繰り広げる。

「勝弘、かなりゆったりしたペースだな」

「はい」

顧問の松橋が勝弘の元にやって来た。

勝弘もこの後、リレーの決勝を控えていた。

召集までには多少の時間と水分補給も要する。

とにかく走り通しの体をどのようにリレーに活かすかが問題だ。

「昂はいつも通り後方から一気に抜かしていくのだろうが、
新らしくないな、いつもはレースを引っ張るくせに四番手にまで
控えてる」

松橋は新らしくない勝負の仕方に多少の不満があった。

「先生、ただどあいつはやりますよ。」

たぶん今までと同じレースじゃないことに周りが驚いてる。

あいつは昂さんにまで多少のプレッシャーを与えているみたいで
す」

「それもあるが、あくまでもいつもと同じメンバーなら通用する走り方だ。」

今日は一人、昴と同じレベルの選手がいるからな」

松橋は昴の前にいる黒いユニフォームをきた選手に注目していた。

「北高ですね。確か二年生」

「ああ、今まで無名の選手だったから決勝に出て来たことで驚いてる奴もいるが、

俺は去年から不気味に思ってたよ。

あいつが八百を走ったら昴が負けるかもしれないってな」

決勝で顧問がこんなことを言うのは百パーセントなかった。

だが、昴はそれを感じていた。

自分が負けるかもしれない相手は、新たじゃなく目の前にいる選手ではないかと……

「あらたあ！ ペースを上げろ！！ 吞まれるぞ！！」

勝弘が叫んだ！ ラスト二百メートルにかけるのは危険過ぎる！

『ペースを上げろって……昴ちゃんに負けたくないんだよ』

新はまだ後方にいるだろう昴を警戒していたが、

一気に新のペースは乱される。

「残りあと一周」

鐘の音と共に二人の選手が新を抜かし、先頭にまで踊り出て来たのだ。

『昴ちゃん！』

昴は自分など見てもいなかった。

厄介な相手が昴の後方をピッタリ付けていたのである。

『何なんだよ、こいつ!』

全く出会ったことのないプレッシャーがここにあった。

昴の後ろを走る選手、原井賢吾、後に『晴天』のもう一人のボーカーリストにここで出会ったのである。

第九話…こんなに遠い

ラスト四百メートル、スローペースから一気にハイペースに変わる。

スタミナとスピードが試される。

レベルの違いが明確にされていた。

「嘘だろ……あと三百も残ってるのにあんなに飛ばしても平気なのかよ……」

「昴……何がなんでも勝っておけ」

いつもより昴の追い上げが早い。

昴と原井賢吾を追い掛ける力が残っていたのは新だけ。

しかし、その差も十メートル近く広がっていた。

「先生、新はまだいけますか？」

「チャンスはある。あれぐらいでへばるスタミナじゃない。

ただ、昴のトップスピードに残り百でどこまで追いつけるかだが、あの前の二人がまだスピードが出る可能性の方が高い。

あいつもそろそろ仕掛けなければ二位にすらなれない」

出来れば追い付いてほしいと松橋は思っていた。

新の努力は松橋も認めている。

昴に今年は近付き、来年は昴のタイムも抜くと見越していた。だからこそ、この大会で自信も付けてほしいと思っていたのだ。

「新！ 追い付け！」

松橋の檄が飛ぶ。その声は新に届いた。

『負けるかよ』

新のスピードが上がり始めた。

赤い鉢巻きが風に靡く。

残り二百にはその差は五メートルもなかった。

『新も来たか。さて、こいつらをどうやってバテさせるか……』

昂はまだ考えるだけの余裕があった。

ピツタリと並ぶ賢吾を負かすためには、明日の千五の決勝に疲れを残すかもしれない。

しかし、負けるよりはマシだった。

『悪い、まだ全国で一番はやらない』

昂は一気にスピードを上げた。

それに賢吾と新は必死に食らいついていく。

「昂！ 絶対に勝て！」

「新！ まだ離されるな！」

松橋と勝弘はお互いの役目が分かっているかのように叫ぶ！

だが、残り百で新はスピードが追い付かなくなった。

「あらたあ！」

美砂は少しずつ離されていく新に力の限り叫んだ！

離れてほしくない、これ以上負けてほしくない、それだけだった。

『くそっ！ 何でこんなに遠いんだよ・・・』

レース中なのに涙がこぼれてくる。

少しでも追い付いたと自信を持ったのに、それは全く意味を持たなかった。

自分はまた負けるのだ。

『くそっ！ まだ食らいつくか』

後は根性比べ。だが、負けるわけにはいかない。

ゴールする、速報が流れる。

三人は関東大会に出場することだけが決定した。

第十話：届くはずの歌

二十五歳になった新は、地区大会の決勝のときをインタビューで語ったことがある。

「あの時、初めて賢吾に出会いました。

こいつけっこう抜けてる性格してる癖に、恐ろしく遠い存在だと感じました。

だけど、こいつと音楽で出会えた時に、

俺は立ち直ったんですよ」

「新ちゃんは根っこからいいやつですからね」

八百メートルの速報は恐ろしいものになった。

三位の新ですら大会新記録。

一位の昴と二位の賢吾は、高校新記録を叩きだしたのだった。

「うわあああ！！」

会場が割れた！

すべての観客達が拍手を送った！

昴はガッツポーズをとり、賢吾も会場に手を振る。

しかし、普通なら自己ベストに大会新記録を叩きだした新に送られてもいいであろう賛辞を、

かけてやれるものが誰もいなかった。

恋人の美砂ですら、真っ白になっている新たに何も言えなかった。

「新、早くダウンに行け。

お前にはまだ明日の千五が残ってるだろう。」

そこで昂に負けるな。ここで潰されるな」

松橋は新にタオルをかけてやり、昂の元へ行く。

新に必要なのは強さ。けっして慰めの言葉なんかじゃない。

「・・・くそっ」

新は静かに歩き出した。

この地区大会、男女ともにリレーは関東大会に駒を進めた。
南城高校始まって以来の快挙となり、当然総合優勝に結び付いた
のである・・・

「おかえり」

「ただいま」

勝弘はカウンターの席へと腰掛ける。

その前に冷えたオレンジジュースが置かれた。

「今日は一人で帰って来たか。」

新と昂ちゃんが激突した後はいつもそうだな」

「仕方ないさ。新参者にまで新は負けたんだ。」

明日もきっと四人で演奏できないな」

悲しいジャズが店内に鳴り響く。

昨日はノリノリでロックを歌ってた活気は消え去っていた。

「試合が終われば新はひょっこり来るさ。」

あいつもお前も音楽が好きなんだろう？

何より、昨日美砂ちゃんが書いた曲、演奏してみる価値がありそうだ」

マスターは勝弘の前に楽譜を差し出した。

「……せつねえ。今までで一番せつない」

勝弘はそうつぶやく。

「ああ、俺もそう思う」

『本当に伝えたい気持ちはこちらにある
それは人を愛したこと』

勝弘はきつと落ち込んでいるであろう新に、明日この歌詞を見せようと思った。

きつと新には通じるはずだから……

第十一話：賢吾の歌

憂鬱だ、憂鬱だ、憂鬱だ。

三回唱えても心が晴れることはなかった。

昂に負けた、賢吾に負けた。それだけが事実でその分だけ心が重たい。

今から迎える千五の決勝戦にも心がない。

「新！」

観客席から美砂が叫ぶ。勝弘も一緒だ。

「いつまでクヨクヨしてるんだ！」

私があげた鉢巻きを無駄にするな！」

「・・・無駄になって、そんな気分じゃ」

「勝て！ 昂に負けるな！」

美砂は有無も言わず一方的に叱り付ける。

「お前、いい加減に」

「いい加減にしとけ。美砂が勝てといったら勝て。

それに新しい曲が出来たんだ。試合が終わったら俺の店に来い。ほら」

勝弘は楽譜を渡した。それは切ない物語で・・・

「ほら、行ってこい」

「・・・ああ」

歌わせたいと思った。

頭の中にこびりついた歌詞がある。

自分に勝たなければならないと、そう思わせる歌詞があった。

「こんなにも思ってる

こんなにも祈ってる

君に無事でいてほしいと」

「我ながらいい歌詞でしょ！

ラブソングはせつないぐらいが良いんだよね」

この言葉が、後に新達を苦しめることになるなど、
勝弘はまだ思ってもみなかった。

「さて、自己ベストが出るか出ないか賭けるか？」

「私は去年より十秒以上縮まるに賭けてあげる！」

「どうかな？ 立ち直ったか分からないのに」

勝弘は笑った。しかし、この賭は美砂の圧勝だった。

新は二位に入り、自己ベストを十六秒縮めたのである。

そして試合後、ついに運命の出会いがやってくるのだ。

「昴ちゃん先に帰ったのか？」

昨日も今日も一緒に帰っていないと、何だか妙な感じだ。

まあ、昨日は自分が落ち込んでいた性だが・・・

「うん、なんか面白い奴に会ったからかっちゃんのとこに一緒に来るって」

「新しい仲間か！ そりゃいい！」

どんな奴だろうと音楽好きなら歓迎する。それが新だ。

「きっと新とハモったらとんでもなくいいものが出来るんだって。昂がそれだけ惚れ込むなんて奇跡だよね」

美砂は音マニアの昂が気に入っていると言うだけで、おそらくそれほどの声を持っていると期待していた。

「まあ、昂ちゃんのことだしな、とんでもない奴を引っ張りこんでそうだが」

勝弘の予想は当たる。

喫茶店から澄んだ声が響いてくる。

それは文化祭で披露する予定の新曲。

「この声……」

ドアを開ける。

飛び込んで来た声に新は呆然と立ち尽くす。

「いつかあなたに
この小さなものが
精一杯生きてると
伝わるだろうか」

賢吾が歌っていた。

第十二話：晴天

昨日の敵は今日の友とはよく言ったものである。

試合で大敗した相手とここまで打ち解ける奴がいたなんて……

「いやあ！ マジ面白い！」

「俺も！ 新ちゃんはいいい奴だ！」

オレンジジュース片手に、新と賢吾は見事通じ合っていた。

音楽、陸上、さらには食べ物やゲームまで同じ趣味の奴に会えるとは珍しいことだ。

「それにしても、新ちゃんは良い詞を書くね。歌わせてもらって楽しかったよ」

「それなんだけどな、二度目のサビがまだ出来てなくてさ、賢吾、何とかしてくれないか？」

無茶苦茶な注文である。

しかし、賢吾は作った。

「この曲を変えるかもしれないけどさ」

賢吾は立ち上がり歌い始める。

「愛を歌う日にこの世の理の
本当の意味を知るだろうか？
ただ野性のままに君を求めて
こんなに愛していると囁くよ」

とんでもないと思った。

一瞬にしてラブソングに深みが増してしまった。

「お見事……」

昂がつぶやいた言葉だけが時間を持たせる。

「まあ、今日は美砂のやつを歌うんだろ？」

俺がキーボードやるからさ、昂ちゃんバイオリンやりなよ」

賢吾の意見によりやく全員がはっとした。

「ああ、それじゃあいきますか」

再び立ち上がるステージの上。

気がつけば喫茶店のドアが開かれている。

それだけ客の入りが多くなっていた。

「どうも！ 『晴天』の新人、原井賢吾です！」

「ええっ！」

いつの間にか決まったグループ名。

この賢吾の思いつきが後の晴天に繋がっていく。

「今日は昂ちゃんがバイオリンやりますので、

俺が変わりにキーボード弾きます！」

歓声上がる。昂のバイオリンデビューは初めてだった。

「それでは姐御にバトンタッチします」

「姐御って……では、晴天の新曲を聞いてください。
タイトル『願いつづけること』」

拍手が巻き起こる。

そしてバイオリンの静かな音色が響き渡り、
とてもせつない思いが伝えられていく。

物語は簡単なこと。

起源前の戦いの歴史の記憶を持つ一人の女性が、
戦いに命を落とした愛する人を思っていたという歌。
ただ、歌詞が切な過ぎた。

「古代文字に書かれた戦いの歴史は
その時代に起こった一部でしかなくて
本当に伝えたい気持ちはここにある
それは人を愛したこと」

二番目のサビを歌ったとき、すでに空気は静まり返っていた。
そして最後のサビに入る。

「起源前まえから君を探していた
もう一度出会える時代を求めて
君に出会えたから僕は笑えたんだ
だからもう一度だけ会いたい」

秒針の音がしばらく聞こえていた。

第十三話：昂の決意

昨夜にどれだけ騒いでも、朝練は参加しなければならぬのが南城高校である。

「やりすぎた……」

「俺も……」

新と勝弘はあくびしながらストレッチをしていた。
試合後は比較的にならぬ練習となるものの、
夜更かしの後の練習と授業ほどこいものもない。

「勝、今日の数学俺が当たるんだけど」

「古典のノートと交換だな」

お互いの穴はお互いの利益によって埋める。
それがもつともよい関係だと新は思っている。

「それじゃあ、英語のノートも付けるよ？」

美砂が後から走って来た。
学年の中でもトップクラスの成績優秀者のノートは有り難いものだ。

「ヤキソバパンでいいか？」

「のった！」

美砂はニコリ笑った。
そして女子達の群れの中に走っていく。

「それよりさ、今年の文化祭は賢吾も一緒にステージで歌ってこないかなあ」

「お前とのデュエットか。確かに面白いかもな」

勝弘はライブをイメージする。

間違いなくステージは大ウケだろう。

去年も新の声に先生までもがうけて体育館は熱気に溢れていた。軽音楽部には悪いが、レベルは間違いなくこっちの方が上だと言いきれる自信がある。

「だったらさ、勝に頼みがあるんだけどさ」

「分かってるよ。美砂がロックを歌うならお前らはバラードだ。

いいもの作ってやるから待ってろ」

「かっちゃん大好き！」

「重い！ 離れろ！」

文化祭は間近だった。

そして、昂は進路指導室にいた。

「留学するのか？ お前なら推薦でいろいろ選べる立場だろう？」

成績優秀、陸上は日本一の昂はいろいろな大学から誘いを受けていた。

しかし、続けられた言葉に担任は驚かされることになる。

「先生、俺は駅伝を最後に陸上をやめるよ」
「なっ！」

「俺はドイツに留学してバイオリニストになる。小さい頃からの夢なんだ。ダメか？」

恐ろしいほどあっさりと言いつてくれると担任は思った。

しかし、昂はこうと決めたら真っすぐだ。だからこそ強いことを知ってる。

「……担任としては陸上を続けてもらいたいと思うが、お前はバイオリンの方を選びたいんだよね」

「はい。これからは欲張ってられませんか」

それが大人ということ。陸上選手でバイオリニストはさすがに無理だ。

何よりそんな中途半端を自分で許せはしない。

「分かった。頑張れよ、先生は今年の文化祭も楽しみにしてるんだからな」

「ご期待に添えるように頑張らせていただきます」

昂は満面の笑みで答えるのだった。

第十三話：昂の決意（後書き）

大変遅くなりました！
更新再開します！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3913f/>

伝えきれない恋心

2010年10月9日13時57分発行